

## 森田兼吉先生略年譜・著作等目録

〔経歴〕

- 一九三八年八月一日 東京都中野区に生まれる。
- 一九五七年三月 國學院大学文学部日本文学科卒業。
- 一九五九年三月 國學院大学大学院文学研究科修士課程日本文学専攻修了。
- 一九六三年三月 國學院大学大学院文学研究科博士課程日本文学専攻単位取得満期退学。
- 一九六四年四月 東京都立八王子盲学校教諭。
- 一九七七年四月 梅光女学院大学助教授、一九八三年四月 同大学文学部教授・大学院教授（一〇〇三年）。
- 一九八四年四月、同大学文学部日本文学科主任（一九八八年）。
- 一九七七年一月 武田博士記念賞受賞。
- 一九九一年六月 文学博士（國學院大学）。
- 一九九二年四月 梅光女学院大学副学長（二〇〇〇年）、学校法人梅光女学院評議員（二〇〇三年）。
- 一九九四年四月 梅光女学院大学大学院文学専攻科日本文学専攻主任（二〇〇〇年）。
- 一九九九年二月 受洗（日本基督教団安岡集会所 現安岡教会）
- 二〇〇〇年四月 梅光女学院大学学長（二〇〇三年）、梅光女学院大学大学院文学研究科委員長（二〇〇四年）、学校法人梅光

女学院理事（二〇〇三年）。

二〇〇四年七月二五日 召天。

〔著書・編著書〕

- 著『和泉式部日記論攷』笠間叢書八五（笠間書院、一九七七）
- 編著『飛鳥井雅有日記総索引』私家版（梅光女学院大学森田研究室、一九八四）
- 著『和泉式部日記論攷 第二』笠間叢書二二三（笠間書院、一九八八）
- 著『為頼集全注釈』（風間書房、一九九四）
- 著『日記文学の成立と展開』笠間叢書一九三（笠間書院、一九九六）
- 〔主要論文〕
- 「宸翰本系和泉式部集の性格」（『日本文学論稿』第一輯、一九六一・一〇）
- 「和泉式部日記三系統本の性格・序説」（『國學院雜誌』第六二卷第六号、一九六一・六）
- 「日記文学と読者」（『平安文学研究』第二六輯、一九六一・六）
- 「東山時代の連歌素描」（『歴史教育』第九卷第八輯、一九六一・八）
- 「和泉式部日記作者攷」（『言語と文芸』第三卷第五号、一九六一・九）
- 「和泉式部日記の帥の宮の歌について」（『平安文学研究』第二八

輯、一九六二・六)

「讃岐典侍日記の成立」(『國語國文』第三二卷第一号、一九六三・一)

「和泉式部日記「さきざきみ給らん人」考」(『平安文学研究』第三〇輯、一九六三・六)

「和泉式部日記の矛盾をどう考えるか」(『國學院雑誌』第六四卷第六号、一九六三・九)

「和泉式部正集の日記重出歌について」(『文学・語学』第二九号、一九六三・九)

「村上天皇とかなの御日記」(『風俗』第四卷第二号、一九六四・一二)

「和泉式部正集の日記重出歌本文考——日記原本再建の資料として」(『國學院雑誌』第六七卷第四号、一九六六・四)

「和泉式部日記「風のまへなる」をめぐって——日記と続集の日記歌群との関係——」(『平安文学研究』第三六輯、一九六六・六)

「和泉式部日記「またましも」の歌考——日記・正集・千載集の關係」(『國語と國文学』第四四卷第二号、一九六七・一一)

「南院考——帥宮敦道親王伝のために」(『日本文学論究』第二八冊、一九七〇・三)

「敦道親王の結婚」(『中古文学』第一二号、一九七三・五)

「宇津保物語にかかれた日記文学的作品——日記文学史へのアプローチの一つとして——」(『平安文学研究』第五二輯、一九七四・七)

「唯詩ヲ以テ友ト爲ス——帥宮敦道親王と漢詩文——」(『へいあん』二、一九七四・七)

「讃岐典侍日記「昔の御ゆかり」をめぐって——藤原長子とその母——」(『國語と國文学』第五二卷第八号、一九七四・八)

森田兼吉先生略年譜・著作等目録

「敦道親王とその父母——帥宮敦道親王伝の基盤として——」(『文学・語学』第七四号、一九七四・一一)

「讃岐典侍日記「昔の御ゆかり」を巡って——藤原長子とその母——」(『國語と國文学』第五二卷第八号、一九七四・八)

「帥宮敦道親王伝考——撰関家の庇護下のつれづれな生活」(『國學院雑誌』第七六卷第二号、一九七五・二)

「和泉式部日記三系統本の性格序説」(『日本文学研究資料叢書平安朝日記』和泉式部・更級日記・讃岐典侍日記)有精堂出版、一九七五・一一)

「敦道親王の幼少時代」(『平安文学研究』第五四輯、一九七五・一一)

「和泉式部の歌と帥宮の歌——「つまなきねや」をめぐって」(『國學院雑誌』第七六卷第一号、一九七五・一一)

「敦道親王の無常感と宗教的心情」(『日本文学研究』第一三号、一九七七・一一)

「夢よりもはかなき——女流日記文学と夢」(梅光女学院大学公開講座論集第三集『文学における夢』笠間書院、一九七八・四)

「彈正宮為尊親王伝考」(『日本文学研究』第一四号、一九七八・一一)

「南海流浪記考」(『日本文学論究』第三九冊、一九七九・七)

「暗きより暗き道に——和泉式部と敦道親王——」(『日記文学』品論の試み』笠間書院、一九七九・一〇)

「和泉式部と為尊親王」(『日本文学研究』第一五号、一九七九・一一)

「和泉式部の代作歌」(『日本文学研究』第一六号、一九八〇・一一)

「かげろふの日記」私注——町の小路の女をめぐって——」(『日本文学研究』第一七号、一九八一・一一)

「日記文学における語りの性格」(梅光女学院大学公開講座論集第

- 一集『語りとは何か』笠間書院、一九八二・六)
- 「和泉式部と帥宮敦道親王——寛弘元年の二人——」(『日本文学研究』第一八号、一九八二・一一)
- 「日記文学史の可能性」(『日本文学』第三二卷第八号、一九八三・五)
- 「飛鳥井雅有と日記文学」(『日本文学研究』第一九号、一九八三・一一)
- 「和泉式部伝のいくつかの問題」(池田富蔵博士古稀記念論文集『和歌文学と周辺』桜風社、一九八四・一一)
- 「十六夜日記」論——注釈の方法に触れつつ——」(『日本文学研究』第二〇号、一九八四・一一)
- 「かげろふの日記」の拓いたもの——平安女流日記文学の自伝的性格——」(梅光女学院大学公開講座論集第一七集『日記と文学』笠間書院、一九八五・六)
- 「かげろふの日記」解釈論——「かへし、いと古めきたり」[例のつれなうなりぬ]——」(『日本文学研究』第二二号、一九八五・一一)
- 「和泉式部日記の成立」(別冊国文学「王朝女流日記必携」一九八六・一)
- 「一条朝日記文学——『和泉式部日記』の成立へ——」(古代文学論叢第一〇輯『源氏物語とその周辺の文学 研究と資料』武蔵野書院、一九八六・五)
- 「権記」の夢「小右記」の夢——女流日記文学の夢への序説——」(『日本文学研究』第二二号、一九八六・一一)
- 「かげろふの日記」章明親王関係諸段考——道綱母と兼家との一体化表現——」(『日本文学研究』第二三号、一九八七・一一)
- 「和泉式部統集日次歌群の方法」(和歌文学の世界第一二集『論集』和泉式部』笠間書院、一九八八・九)
- 「道綱の母の結婚——一夫一婦制論を考える——」(『日本文学研究』第二四号、一九八八・一一)
- 「漢文日記の記録性と文学性」(『日本文学講座第七巻『日記・記録・随筆』大修館書店、一九八九・五)
- 「光源氏はなぜ絵日記を書いたか——須磨・明石から総合させへ——」(梅光女学院大学公開講座論集第二五集『源氏物語』を読む』笠間書院、一九八九・九)
- 「弁内侍日記」論——形態の確認——」(『日本文学研究』第二五号、一九八九・一一)
- 「日次歌群和泉式部——白露も夢もこの世もまぼろしも」(『国文学解釈と教材の研究』第三五巻第一二号、一九九〇・一〇)
- 「讃岐典侍日記」の主題(女流日記文学講座第四巻『更級日記・讃岐典侍日記・成尋阿闍梨母集』勉誠社、一九九〇・一一)
- 「弁内侍日記」論——弁内侍と少将内侍——」(『日本文学研究』第二六号、一九九〇・一一)
- 「女流日記文学研究の現在と課題——「かげろふ日記」をめぐる——」(『國學院雑誌』第九二巻第一号、一九九一・一一)
- 「和泉式部日記」『てならひのやうにかきふるたる』「文考」(論集日記文学『日記文学の方法と展開』笠間書院、一九九一・四)
- 「和泉式部日記」の成立(女流日記文学講座第三巻『和泉式部日記・紫式部日記』勉誠社、一九九一・七)
- 「平安女流日記文学と手紙」(梅光女学院大学公開講座論集第二九集『文学における手紙』笠間書院、一九九一・八)
- 「弁内侍日記」論三——その文学性——」(『日本文学研究』第二

- 七号、一九九一・一一)
- 『土佐日記』論——日記文学史論のために——(『日本文学研究』第二八号、一九九二・一一)
- 『讃岐典侍日記』の作者にとって堀川天皇とはどんな存在だったか(古代の日記の謎)(『国文学解釈と教材の研究』第三八巻第二号、一九九三・一二)
- 『贈歌の意図的な多義性』「口なしにちしほやちしほ」心あててにそれかとぞ見る(『燔祭』第三号、一九九三・三)
- 『讃岐典侍藤原長子の前半生——父母の死を中心に——』(『香椎瀧』第三八巻、一九九三・三)
- 『更級日記』論——冒頭部の虚構と執筆意図(『日記文学研究』第一集、新典社、一九九三・五)
- 『たまきはる』の成立と主題——奥書・第二部の検討から第一部へ——(『日本文学研究』第二九号、一九九三・一一)
- 『男』の描写から『女』を読む——『和泉式部日記』に描かれた師宮敦道親王——(『梅光女学院大学公開講座論集第三四集』表現の中の女性像』笠間書院、一九九四・一)
- 『長秋記』に見る藤原長子の言動——『讃岐典侍日記』作者のその後(『輔仁大学外国語学院日本語文学系「日本語日本文学」第二〇号、一九九四・六)
- 『山の端に限なく澄める秋の夜の月——『和泉式部日記』十月の矛盾再考』(『燔祭』第四号、一九九四・七)
- 『和泉式部日記』の方法(『平林文雄教授退官記念論文集』平安日記文学の研究』和泉書院、一九九四・一〇)
- 『記録としての日記の考察——日記文学前史——』(『日本文学研究』第三〇号、一九九五・一)
- 『和泉式部研究の動向——昭和五十一年以降(小野小町と和泉式部)』(『国文学解釈と鑑賞』第六〇巻第八号、一九九五・八)
- 『かげろふ』の夢『更級』の夢(『王朝日記の新研究』笠間叢書二八五、笠間書院、一九九五・一〇)
- 『和泉式部日記』は三条西家本だけでは読めない——『和泉式部日記』三系統論再読・続稿——(『日本文学研究』第三一号、一九九六・一)
- 『古体の老母の孤独な自己表白——「成尋阿闍梨母集」の成立と性格』(『王朝文学史稿』第二一号、一九九六・三)
- 『和泉式部日記』三系統本再読(『新国学の諸相』おうふう、一九九六・六)
- 『中世の日記・随筆』(『文学・語学』第一五二号、一九九六・一〇)
- 『富士御覽日記』の成立とその周辺(『日本文学研究』第三二号、一九九七・一)
- 『日記文学から読者が見えなくなるとき——』とはずがたり』論への序説——(『日本文学研究』第三三号、一九九八・一)
- 『たまきはる』の序文の考察——その性格と作品の関わり——(『日本文学研究』第三四号、一九九九・一)
- 『日記文学研究のこれから』(『二十一世紀における日本文学の展望』国際会議録二〇〇〇・七)
- 『和泉式部日記』は三条西家本だけでは読めない・続稿——和歌の場合——(『日本文学研究』第三八号、二〇〇三・二)
- 『艶詞』考——描かれた恋と成立(『日記文学新論』勉誠出版、二〇〇四・三)